高等学校現代文B　教材の内容

1部

一　評論

木を伐る人／植える人（赤坂憲雄）　環境論
木を「伐ること」と「植えること」は人にとって対立ではなく共存する事柄だったことを、実証的な研究の成果から明らかにする。

「市民」のイメージ（日野啓三）　社会論
アメリカの陪審員制度の考察から民主主義の基底を考え、「市民」に「生まれる」のではなく、「なるのだ」と能動的に捉える。

二　小説

山月記（中島敦）
若くして才能を発揮した李徴は、詩人として名をなすべく詩作にふけった。しかしその後に彼を待っていたのは数奇な運命だった。

少女（河野多恵子）
初対面の挨拶に失敗し、隣人の女性との意思疎通がぎこちなくなった少女が取った態度とは。

三　評論

ミロのヴィーナス（清岡卓行）　芸術論
「ミロのヴィーナス」の失われた両腕に美を見いだし、人間存在のありようを洞察した論考。

ホンモノのおカネの作り方（岩井克人）　経済論
「ホンモノのおカネ」とは何か。貨幣の本質について、鮮やかなパラドックスによって描き出す。

人類による環境への影響（鷲谷いづみ）　環境論
人類が自然を力で克服する「征服型」の環境戦略が、地球環境に急激な変化を引き起こしている可能性を論じる。

四　詩歌

パンの話（吉原幸子）
「パン」と「バラ」をとおして、生と芸術の境界線を生きる「わたし」の決意を表した作品。

帰途（田村隆一）
言葉を「おぼえる」ことで「ぼく」は「きみ」の何を知ることができたのか。言葉と心の関係を鮮やかに切り取る。

永訣の朝（宮沢賢治）
「いもうと」が死ぬ前に「わたくし」に頼んだことと、それが意味することとは。若くして死んだ妹に送る挽歌。

大きなる――短歌十六首
佐佐木信綱から穂村弘まで近現代の歌人十六人の秀歌を、「卵」「木」「雲」「あなた」「制服」「夕焼け」「釘」「帽子」の八つのジャンルに沿って選んだアンソロジー。

五　評論

疑似群衆の時代（港千尋）　メディア論
コンピュータと情報通信機器を通じて形成された現代の群衆は、彼らの特徴を擬似性と待機性から説明する。

病と科学（柳澤桂子）　生命論
病気の治療において科学に全てをゆだね、人が病を受けとめる力を失っていくことの危うさを論じる。

ロゴスと言葉（丸山圭三郎）　言語論
「ロゴス」の意味は対象を「とり集めて目の前に置く」ことであり、それこそが言葉のもつ働きであることを説く。

六　小説

夏の花（原民喜）
妻の初盆を前に夏の花を墓前に手向けたその二日後、ふるさとの街に原子爆弾が炸裂する。原爆後の悲惨な状況を手記形式で綴った「私」の物語。

ひよこの眼（山田詠美）
中三の途中で転向してきた「彼」と「私」との出会いと、突然訪れた悲しい別れ。思春期の淡い恋と心の痛みを描いた小編。

七　評論

南の貧困／北の貧困（見田宗介）　グローバリズム論
先進資本主義国による貨幣の尺度で計られた「貧困」と、測定できない「幸福」とは、別の次元で捉えるべきだと主張する。

戦争の〈不可能性〉（西谷修）　グローバリズム論
二十世紀の戦争のもたらした戦争の「世界化」の内実を解き明かし、これから人類が歩むべき道を示唆する。

「である」ことと「する」こと（丸山真男）　近代化論
「である」価値と「する」価値という概念から、近代社会を問い直す、戦後の思想界をリードした政治学者による論考。

八　小説

こころ（夏目漱石）
人と人との間に横たわる闇と孤独、エゴイズムを鋭く見つめた近代の代表的小説。

批評のまなざし

ネット上の発言の劣化について（内田樹）　メディア論
マスメディアが情報の質を選別してくれない現代にあって、情報の価値を検証し認識することの必要性と重要性を述べる。

空白の意味（原研哉）　芸術論
日本人が空白を、何もないのではなく何かが隠されている、と捉えて表現し活用してきたことを絵画を例に述べる。

科学の現在を問う（村上陽一郎）　科学論
脳死判定による臓器移植を認める法律に対して、筆者が感じた違和の理由と、その根元にあるものを考察する。

2部

一 評論

ぬくみ（鷲田清一） 身体論
他者と「つながっていたい」という気持ちの裏には、自らの存在を認めてほしいという願いがあることを論証する。

身体〈の〉疎外（黒崎政男） 身体論
電脳化した現代社会において疎外されてきた「身体」が、逆に「私」をのけものにし始める。バイオメトリックス認証から現代の「私」を考える。

身体像の近代化（野村雅一） 身体論
「身体」がどのように管理されてきたのか。近代日本の歩みを「身体」から捉え直す。

抗争する人間（今村仁司） 倫理論
相手を上回ろうとする人間の欲望が虚栄心となり、ときとして精神的・物理的な暴力となる危険性を指摘する。

虚ろなまなざし（岡真理） グローバリズム論
難民の子どもに自己同一化することで自分たちの加害者性を隠蔽するというヒューマニズムの陥穽を突く。

ある〈共生〉の経験から（石原吉郎） 社会論
共生とは偶然や便宜的な形ではなく生存に関わる切迫感から始まることを、シベリア抑留の実体験に即して述べる。

陰翳礼賛（谷崎潤一郎） 文化論
日本の食器や食材の美しさは、暗闇と密接な結びつきがあることを指摘する、日本文化論の古典的作品。

日本文化の雑種性（加藤周一） 文化論
今日の日本文化がさまざまな部分で分かちがたく西洋文化と結びついていることを、具体例に則して述べる。

無常ということ（小林秀雄） 文化論
この世の「無常」と「常なるもの」について論じる、近代を代表する評論家の論考。

現代日本の開化（夏目漱石） 近代化論
明治維新以来の日本社会の動きを「外発的開化」と批判する講演記録。

二 小説

舞姫（森鷗外）
ベルリンの街を舞台に、若きエリート太田豊太郎と踊り子エリスの出会いと別れが描かれる。日本近代文学を代表する作品の一つ。

檸檬（梶井基次郎）
「えたいの知れない不吉な塊」によって鬱屈した気分の「私」は、八百屋で檸檬を買ったのをきっかけに、ある行動を起こす。

美神（三島由紀夫）
死を目前にした古代彫刻の権威R博士が語る、自ら発掘したギリシア神話の女神アフロディテの像に関する真実とその結末とは。

鞄（安部公房）
持ち主の行き先を決めてしまう鞄をとおして人間の自由について考えさせる、不思議なタッチの現代小説。

涙の贈り物（レベッカ・ブラウン／柴田元幸訳）
ホスピス入院を受け入れられない末期のＨＩＶ患者とそれにかかわるケースワーカーの姿をとおして人間の尊厳を痛切に描く、現代アメリカ小説。

三 詩歌

ギリシア的抒情詩（西脇順三郎）
「神の生誕の日」を祝福する輝かしいイメージの「天気」と、「ぬらした」の反復と視覚的なイメージが特徴の「雨」とを組み合わせ詩的世界を味わう。

湖水（金子光晴）
湖に逆さまに映る世界とそこに表れる「僕」の心を、静謐な筆致で描く。

時計（萩原朔太郎）
「古いさびしい空家」で「夢」や「まどろみ」に沈む「私」を錆びついた柱時計の音が呼び覚ます。擬音語が印象的な一編。

鞦韆は――俳句十六句
三橋鷹女から田中裕明まで現代俳人十六人の秀句を、「鞦韆」「鳥」「海」「戦争」「燕」「広島」「咳」「こども」の八つの題に沿って選んだアンソロジー。

現代評論を読む

累積的社会・停滞的社会（レヴィ＝ストロース／川田順三・渡辺公三訳） 文化論
近代社会を生み出し現代に至る産業文明を発展させてきた西欧社会の価値観もまた、一つの特殊な世界観であることを解き明かす。

写真に何が可能か（多木浩二） 芸術論
現代の工学技術が生み出した写真芸術を取りあげ、人間の現実的な営みとしての芸術について論じる。

コミュニケーションに未来はあるか（大澤真幸） メディア論
メディアを言語・社会・権力などにわたる現代社会の広範なテーマとして捉え、コミュニケーションの未来を重層的に考察する。